〔古今和歌集序〕花になくうぐひす、水にすむかはづの聲をきけば、いきとしいけるもの、いづれか歌をよまざりける、

〔後撰和歌集十八雜〕かはづをきゝて　よみ人しらず

我やどにあひやどりしてすむかはずよるになればや物はかなしき

〔後拾遺和歌集二春〕長久二年弘徽殿女御家歌合に、かはづをよめる、　良暹法師

みがくれてすだく蛙のもろ聲にさはぎぞわたる井手のうき草

〔新古今和歌集二春〕延喜十三年亭子院歌合歌　藤原興風

あし曳の山吹の花散にけり井手のかはづは今やなくらむ

〔無名秘抄〕井手の河津と申ことこそ、やうある事にて侍れ、よの人思ひて侍るは、たゞかへるをみなかはづといふと思へり、それもたがひ侍らねど、かはづと申かへるは、外にはさらに侍らず、たゞこの井ての河にのみ侍る也、色黑きやうにて、いとおほきにもあらず、よのつねのかへるのやうに、あらはにおどりあるく事などもいとも侍らず、常に水にのみすみて、夜ふくるほどに、かれがなきたる聲、いみじく心すみ、ものあはれなる聲にてなん侍る、春夏のころ、かならずおはして聞給へと申しかど、其のちとかくまぎれて、いまだ尋ずとなん語侍し、〇下略

〔袋草紙三〕加久夜長帶刀節信ハ數奇者也、始テ逢二能因一テ、相互ニ有二感緒一、能因云、今日見參ノ引出物ニ可レ見物侍リトテ、自二懷中一錦小袋ヲ取出、其中ニ鉋屑一筋アリ、示云是ハ吾重寶也、長柄橋造之時鉋クヅナリト云々、于レ時節信喜悅甚ッテ、又自二懷中一紙ニ裹物ヲ取出、開レ之見ニ、カレタルカヘルナリ、コレハ井堤ノカハヅニ侍云云、其ニ感歎シテ各懷之退散云々、

〔河蝦考〕おひつぎの考〇中略

幾度も玉川にゆきて、下つ瀨六合のわたりより二子のわたりをさかのぼり、〇中略青梅の里にい